シンポジウム　ネクストジェネレーション

2026年11月29日(日) 11:10 ~ 12:10 | 第1会場（むらさきホール：5号館1階）

[ynzOZUt2] シンポジウム「Next generations 夢を語る」

司会：平島　賢一
講師：井窪　文耶（香川大学医学部付属病院）
　　池本　祐貴（いの町立介護老人保健施設　仁淀清流苑）
　　青木　卓也（愛媛県立中央病院）
　　田上　友希（徳島赤十字病院）

11:10 ~ 12:10
[ynzOZUt2-01] シンポジウム　「Next generations夢を語る」

© 2026 四国理学療法士会

シンポジウム「Next generations 夢を語る」

香川大学医学部附属病院

医療技術部　リハビリテーション部門

井窪　文耶　先生

【略歴】

2014 年　徳島文理大学 保健福祉学部 理学療法学科 卒業

2014 年　香川大学医学部附属病院　入職、現在に至る

2026 年　広島大学大学院医系科学研究科 総合健康科学専攻 保健科学プログラム 博士課程前期 入学

【資格】

3 学会合同呼吸療法認定士、登録理学療法士、認定理学療法士（脳卒中・運動器）、
がんのリハビリテーション研修会 修了、臨床実習指導者講習会 修了

【所属学会】

日本運動器理学療法学会、日本神経理学療法学会、日本膝関節学会、日本スポーツ整形外科学会、
日本体力医学会、日本臨床バイオメカニクス学会

【県士会活動】

香川県理学療法士会　スポーツ支援部　部長

第 32 回香川県理学療法士学会　準備委員

【受賞歴】

第 1 回運動器 SaMD 研究会　優秀演題賞

【助成金】

2025 年 日本膝関節学会研究助成金　取得

若手理学療法士の道しるべとなるために

―ジェネラリストからスペシャリストへの歩み―

本講演では、若手理学療法士の今後のキャリア形成における道しるべとなることを目的に、演者がこれまで歩んできた 13 年間の軌跡を振り返るとともに、現在取り組んでいる学術活動や今後の展望について紹介する。

学生時代、臨床実習や卒業研究を通して、急性期運動器疾患に対する理学療法や研究活動を学びたいと考え、現在所属する大学病院へ就職した。就職後は大学病院という環境で、まずは多様な疾患に対応できるジェネラリストを目指した。1～3 年目には運動器疾患に加え、呼吸器疾患、脳卒中など、さまざまな領域の臨床経験を積んだ。また、1 年目から学会発表（初めての学会は本学会：高知県）を経験し、臨床と学術活動を並行して進める基礎を築いた。3 年目には呼吸器疾患に対する理解を深めるために、実技研修会に参加し、3 学会合同呼吸療法認定士を取得した。5 年目には、それまで苦手意識のあった脳卒中領域を改めて基礎から学び直し、日々の臨床を振り返りながら、特に早期介入に尽力し、その過程で脳卒中認定理学療法士を取得した。同時期より小児領域を担当する機会にも恵まれ、脳性麻痺や神経筋疾患、呼吸理学療法を経験した。これまでに培った運動器、呼吸器、脳卒中領域の知識や技術を小児領域に応用する一方、発達過程を学ぶことで、成人領域における理学療法を捉え直す機会にもなった。さらに、運動器領域における学術活動を継続し、7 年目には運動器認定理学療法士を取得した。演者は目の前の患者から学ぶことを大切にしながら、資格取得を自身の学習目標として活用してきた。専門領域を体系的に学び、日々の臨床を振り返るための目標として捉えることで、継続的な自己研鑽につながると考えている。

ジェネラリストとして多様な領域を経験する中で、転機となる出会いがあった。それは、理学療法士の臨床的役割を理解し、臨床のみならず研究活動にも共に取り組んでくださる整形外科医との出会いである。運動器疾患に関心を持って入職したこともあり、まさに原点回帰ともいえる転機であった。整形外科医や他施設との共同研究をはじめ、企業からの支援も得ながら、現在 13 年目では、変形性膝関節症患者における動的内側半月板逸脱の可視化をテーマとして学術活動に取り組んでいる。今後は臨床と研究の双方から理学療法の発展に貢献できるスペシャリストを目指したい。さらに、ウェアラブルデバイスや AI などを活用し、理学療法介入の効果を客観的に評価できるシステムの構築を目指している。

これまでの人生において、「繋がり」が大きな転機と成長のきっかけとなってきた。こうした自身の経験を通して、キャリアに正解は一つではなく、目の前の臨床を大切にしながら、資格取得や学術活動、人との繋がりを自身の成長のためのきっかけとして活用してほしい。そして、若手理学療法士が四国の理学療法をともに盛り上げ、最終的に患者へ還元していくことを期待したい。

シンポジウム「Next generations 夢を語る」

いの町立介護老人保健施設 仁淀清流苑

池本　祐貴　先生

【略歴】

社会人を経て

2017 年　土佐リハビリテーションカレッジ（現・高知健康科学大学）　卒業

土佐市土佐市民病院入職

いの町立国民健康保険仁淀病院・いの町立介護老人保健施設仁淀清流苑入職

【所属学会】

日本予防理学療法学会、日本地域理学療法学会、日本老年療法学会、

日本サルコペニア・フレイル学会

【県士会活動】

高知県理学療法士協会　調査部

高知健康科学大学客員研究員

知見と地域をつなぐ流れを後世へ

高知市に隣接するいの町には，清流・仁淀川が流れています．上流から下流に至るまで「仁淀ブルー」とも呼ばれる澄んだ水は，人々の暮らしに豊かな恵みをもたらしています．私は，いの町が運営する仁淀病院事業の一つ，介護老人保健施設に勤務する理学療法士です．社会人を経て理学療法士を志し，前職では行政や事業者の取り組みを分析・紹介するマーケティング業務などに携わっていました．地域医療・介護の現場に立って改めて感じたのは，経験を大切にしながらも，対象者や地域を客観的かつ具体的に捉えることの重要性です．「この方の移動能力を規定する因子は何か」「地域で暮らす高齢者の特徴を，私たちはどこまで理解できているのか」．そんな臨床や地域医療システムへの疑問と，今ある経験や情報を後世に残したいという思いが，現在の活動の原点です．

これまで要支援・要介護高齢者を対象に，起立・歩行能力，移動制限や歩行自立に関連する因子などを統計解析やデータサイエンスを用いて検討してきました．活動を続ける中で，視線は次第に源流の方、上流域に向かいました．公衆衛生を一つの川に例えるなら，要介護状態となった方を支える下流はもちろん，その上流にはフレイル，プレフレイル，MCI があり，さらに先には健康な地域住民の生活があります．下流で一人ひとりを切り捨てない．同時に川を遡り，上流域でフレイルや要介護状態に至る時期を少しでも遅らせる．その両方に関わることが，地域の療法士の役割だと考えています．

現在は高知健康科学大学や株式会社アクトワン，行政等と連携し，予防事業のフィールドで，地域在住高齢者の QOL やフレイル, MCI, 歩幅, 歩行変動, 神経筋機能などを捉える活動にも取り組んでいます．最近では医師やデザイナーと協働し，自分の歩幅や歩くことの大切さを住民自身が理解できる「歩幅冊子」を制作しています．世界の研究や実践から得られた知見を，住民が理解し行動できる言葉やデザインへ翻訳し，地域へ返していく試みです．振り返れば，前職でも様々な人々と関わりながら「まちづくり」に携わってきました．立場や方法は変わっても，人と人をつなぎ，地域をより良くしていくという営みは，現在の歩幅冊子をはじめとする活動にもつながっています．過去の経験や出会いが新たな形で現在につながり，さらに未来へ流れていくことを実感しています．人口減少と高齢化が進み，医療・介護を支える人材や資源も限られていきます．一施設，一職種だけで抱え込まず，多職種が学際的に協働することが重要です．それぞれの現場にある小さなデータや疑問を持ち寄れば，一施設では見えなかった地域の課題や重度化の兆候が見えてくるかもしれません．20 代，30 代，そして中堅の理学療法士が，目の前の一人を大切にしながら，得られた経験や疑問を次の世代へ残していく．仁淀川の流れのように，上流から下流まで人生を見渡し，人と知見，地域をつなぐ．その小さな流れの積み重ねが 10 年，20 年後の地域を変え，後世の医療・介護・予防につながると信じています．

シンポジウム「Next generations 夢を語る」

愛媛県立中央病院　リハビリテーション部

青木　卓也　先生

【略歴】

2013 年　県立広島大学保健福祉学部理学療法学科　卒業
　　愛媛県立中央病院リハビリテーション部

2017 年　県立広島大学大学院総合学術研究科修士課程　修了

【資格】

認定理学療法士（脊髄障害）

障がい者スポーツ指導員中級

心臓リハビリテーション指導士

【主な役職等】

愛媛県理学療法士会　理事（学術部担当）

四国理学療法士会　事務局長

日本理学療法士協会　会員の働き方の支援部会　部会員

県士会活動って、何のため？―これまでを糧に、これからを描く―

理学療法士の有資格者数が増加を続ける一方で、日本理学療法士協会の会員数は伸び悩んでいる。だからこそ、理学療法士を取り巻く環境が大きく変化する今日、組織として会員とのつながりをいかに維持し、広げていくかは、今後の理学療法士の職能活動における重要な課題の一つである。

私は 2013 年に理学療法士免許を取得し、翌年には愛媛県理学療法士会の学術部員として活動を始めた。そして現在では、学術局の理事を任せていただいている。こうして十数年にわたり県士会活動に携わってきたが、その意義については、自分自身、幾度となく自問してきた。日々の臨床と研究は独立したものではなく、理学療法士としての質を上げるために必要であることに異論はないだろう。一方、県士会活動においては業務外や休日を使っており、その意味や価値については人それぞれ考え方が異なる。県士会活動には、決して小さくない時間的な負担が伴う。家族との時間や自分自身の休息を削って活動に充てている会員も少なくないだろう。それでもなお私が県士会活動を続けてきたのは、臨床では出会えない他施設・多世代の理学療法士との対話や、一つの企画を仲間と作り上げていく過程に、業務としての義務感だけでは説明できない充実感を感じてきたからだと思う。これまで、研修会や県学会、四国学会の企画・運営、学術誌「理学療法の探究」の刊行、そして Podcast「つながる PT しまラジ」の導入など、さまざまな活動に携わってきた。これらの全てが個人の力だけで成し遂げられるものではない。一人では実現できないことを、つながってきた仲間と協力して形にし、それが会員の研鑽や交流の場につながっていく。その過程にある「やりがい」は、数字や結果などの形として表せるものではないが、私が県士会活動を続けている大きな原動力の一つであると感じている。

しかし、こうした個人的な実感は、理学療法士を取り巻く環境や、協会の会員数という数字の問題の前では見えにくくなりがちである。県士会活動の人材の固定化や世代間の参画の格差が語られるとき、そこでは「負担」の側面ばかりが強調され、活動を通して得られるものについてはあまり語られてこなかったのではないだろうか。

本シンポジウムでは、私自身が県士会活動を通して得てきた経験と、これから描いていきたい夢について語りたい。そのなかで大切にしたいのは、夢や希望を「点」ではなく「線」として描くことである。理学療法士としての歩みは、本来一人ひとり異なる速度と道筋を持つ「線」であり、その「線」のどこに何を位置づけるかもまた、人それぞれでよいはずである。フロアの同志の皆様と、これまでとこれからをつなぐ「線」について議論できれば幸いである。

シンポジウム「Next generations 夢を語る」

徳島赤十字病院　リハビリテーション科

田上　友希　先生

【略歴】

2016 年　徳島文理大学保健福祉学部理学療法学科卒業
　　徳島赤十字病院リハビリテーション科　理学療法士（現在に至る）
2025 年　畿央大学健康科学研究科健康科学専攻（修士課程）修了
2025 年　畿央大学健康科学研究科健康科学専攻（博士後期課程）入学

【資格】

認定理学療法士（脳卒中）、3 学会合同呼吸認定療法士、住環境福祉コーディネーター2 級
介護予防推進リーダー、地域ケア会議推進リーダー、臨床実習指導者講習会終了

【所属学会】

日本神経理学療法学会
日本離床学会

【業績及び社会活動】

2025 年　日本神経理学療法学会　徳島地方会リーダー
2026 年　第 24 回日本神経理学療法学会学術大会　優秀賞
2025 年　第 23 回日本神経理学療法学会学術大会　最優秀賞
2021 年　日赤医学雑誌（症例報告）　功労賞

「未知を既知に変える―次世代が迷ったときに戻れる羅針盤を―」

「未知は、怖い。」新人の頃の私は、目の前の患者に「自分の判断で、この人の生活や未来を変えてしまうのではないか」という怖さを感じていた。リハビリテーションが単なる機能回復ではなく、その人の生活や未来に関わる営みである以上、知らないまま介入することの方が怖かった。だから私は、臨床で生じる「なぜ」を研究の問いに変え、未知を既知に変えることを続けてきた。

私が目指す夢の一つは、神経理学療法の「標準化」である。ただし、それは全ての患者に同じ介入を行うことではない。療法士が共有すべき基礎知識、評価の視点、病態の捉え方、介入を選択するための判断軸を整えることである。人は一人として同じではない。神経障害では、運動として現れる現象の背後に、感覚、知覚、認知、情動、身体性、生活、環境など複数の階層が重なる。だからこそ「何をすれば効くのか」だけでなく、「なぜ、この人に、この現象が生じているのか」を問い続けなければならない。技術が高度になることと、臨床思考が高度になることは同義ではない。

奈良勲先生は、理学療法における科学性とアート性の重要性を説いた。私にとってサイエンスは、迷ったときに戻ることのできる共通の地図であり、アートは、その地図を手に目の前の一人に最適な道を描くことである。標準化された知があるからこそ、個別化された臨床判断を深められる。

一方で、標準化そのものが私を研究へ駆り立てているわけではない。私が本当に楽しいと感じるのは、分からなかったことが少しだけ分かる瞬間である。Popper が述べたように、一つの問題の解決は新たな未解決の問題を生み出す。研究によって知が増えるほど、まだ知らないことの広さが見えてくる。その終わりのない問いの連鎖が、私にとって研究の面白さであり、臨床と学術活動を続ける原動力である。

そして今、かつて抱いた「怖さ」は、消すものではなく、一人で抱え込まず、つながりの中で共有し「問い」へと変えていくものだと考えている。職場では臨床の問いを深め、地域では知識や経験を持ち寄り、大学院では研究を通して未知に向き合う。勉強会、県士会活動、学会発表もまた、知識を得るだけでなく、問いや迷いを共有する場になり得る。学術活動は、完成した人だけの場所ではない。少し先を歩く仲間と出会い、「自分もやってみたい」と思える場所であってほしい。会員で居続ける理由も、資格や制度だけではなく、そこに「共に問い続けたい仲間がいる」と感じられることにあるのではないだろうか。

5 年、10 年後、私の夢は神経理学療法を完成させることではない。次の世代が迷ったときに戻れる羅針盤をつくり、それでも残る未知を、四国の仲間と面白がりながら問い続けられる文化を残すことである。